

BOOK REVIEWS

日米未来戦記と真珠湾攻撃の「奇襲性」

Reviewed by Hidetou Tanaka

BOOK REVIEWED: William H. Honan, *Visions of Infamy — The Untold Story of How Journalist Hector C. Bywater Devised the Plans that Led to Pearl Harbor* (N.Y.: St Martin's Press, 1991, xvi+346p) 邦訳 ウィリアム・H・ホーナン著 猪瀬直樹監修 古賀林幸／藤田佳澄訳『リメンバー——「真珠湾」を演出した男』(東京：徳間書店, 1991年, 318p)

1. ホーナンが提示する新たな視点

1941年12月7日(ハワイ現地時間), 日本は真珠湾を攻撃し太平洋戦争が始まった。この攻撃による開戦劈頭のアメリカの敗北は、アメリカ国民にはかり知れない屈辱感と深刻な危機感を与えた。その悪しき結果として、少なからぬアメリカ国民の深層心理に日本国民は「卑劣な民族」であるとのイメージを根付かせた。その偏見とその偏見を継承した「リメンバー・パールハーバー」という言葉は、未だ日本との友好関係の促進において影を落としている。一方その思わぬ結果として、アメリカ国民に伝統的孤立主義との決別を促し、戦後において国際秩序の維持に積極的に関与する決意を抱かせた。冷戦期においては共産勢力に対抗するための軍事協力を通じて、また冷戦後においては地球的規模の問題解決に取り組むための「グローバル・パートナーシップ」を通じて、アメリカ国民は日本との協調関係を促進させたのであった。このように真珠湾攻撃は戦前日米関係における対立の帰結点であつただけでなく、戦後日米関係における対立と協調の始発点とも言うべき歴史的事件でもあるため、50年を経た今日もそれが持つ意味を問い合わせる試みが行われ、その研究成果に関する論議が続けられている。そして、その主たる争点は、真珠湾攻撃の「奇襲」としての性質を巡るものである。¹なぜなら、この「奇襲」性こそが当時

のアメリカ人に精神的動搖を与える効果的役割を果たしたからである。

真珠湾攻撃の「奇襲」性を巡る論争としては、アメリカにおける「正統派」と「修正派」の論争が主流であった。² 「正当派」と呼ばれる歴史学者の一派は、アメリカ側は真珠湾攻撃を十分予測していなかったのであり、また日本が事前通告なしに攻撃を開始したのであるから、明らかにそれは「奇襲」であったと主張している。一方、「修正派」と呼ばれる一派は、ルーズベルト大統領は、欧州戦争に介入するため日本との戦争を望んでいたのであり、真珠湾攻撃を事前に察知しそれを故意に公にしなかっただけであるから、それは「奇襲」でなかったと主張している。アメリカの最高指導者が真珠湾攻撃を事前に知っていたか、またそれを利用しようとしていたか否かについては真相のほどはわからない。今後もこの点を巡る論議は続けられるであろう。

本書はこれらの論争から距離を置き、日露戦争から日米開戦に至るまでの日米対立の歴史を、ある一人のジャーナリストの生涯と重ね合わせ、真珠湾攻撃の奇襲性の誕生をより長い日米関係史の中で捉え直そうとする試みである。著者のホーナン(William H. Honan)は、二十年以上にわたって『ニューヨーク・タイムズ』(*The New York Times*)で海軍史に関する記事を書いてきた記者であり、現在はその文化担当の主筆である。ホーナンは本書において、バイウォーター(Hector C. Bywater)というイギリス人ジャーナリストの人物像を明らかにし、バイウォーターの戦略構想が帝国海軍とアメリカ海軍に及ぼした影響を検証している。そして、山本五十六がバイウォーターの著作から多大なる影響を受けた結果、真珠湾攻撃を考案し、連合艦隊司令長官としてそれを指揮したという結論を導きだしている。

2. バイウォーターの人物像

バイウォーターは、1884年イギリスの中流家庭に次男として生まれた。少年時代から海軍に対して興味を抱き、海軍に関する知識の豊かさゆえに19歳の若さで、海軍や海事ニュースに多くの紙面を割いていた日刊紙『ニューヨーク・ヘラルド』(*The New York Herald*)の記者となった。彼の初仕事は、日露戦争における日本軍の旅順奇襲攻撃に関する記事であった。日米敵対意識の源泉を日露戦争での日本の勝利と捉えるなら、³ 彼は開戦に至るまでの日米対立の歴史を始めか

ら報じたのであった。1909年からは、イギリス諜報部のエージェントとしても活躍し、9年間にわたってドイツ海軍の極秘情報を収集していた。この期間、彼は海軍専門家としての目を養い、ジャーナリストとしての技能を向上させたのであった。そして、1920年頃から太平洋での海軍戦略に興味を抱き始め、『太平洋の海軍力—日米海軍問題の研究』(*Sea Power in the Pacific: A Study of the American-Japanese Naval Problem*)と題する本を発表した。この本は軍事的価値の高さと記述の正確さから日米両国で高い評価を受け、出版後ただちに大日本帝国海軍(以下帝国海軍と称す)軍令部により翻訳され、『太平洋海権論』という邦題で出版された。市販はされなかつたものの、まもなく帝国海軍兵学校と海軍大学校の学生の必読書に指定されたのだった。その後彼はボルチモア『サン』(*The Baltimore Sun*)の依頼を受け、ワシントン軍縮会議に関する質の高い記事を書き、海軍問題の権威として世界的に名を馳せたのであった。⁴彼の軍事評論は一躍衆目の的となり、その中には当時元アメリカ海軍次官補で、後にアメリカ大統領になったフランクリン・D・ルーズベルト(Franklin D. Roosevelt)が含まれていたのであった。そしてバイウォーターとルーズベルトは、日米両国が実際に戦う可能性があるかどうかについて論争を繰り広げることとなる。ルーズベルトが日米間の戦争はありえないと主張しているのに対して、バイウォーターはその可能性が十分あることを示すため、また、最後には必ずアメリカが勝者となることを示すため、彼の4冊目の著書『太平洋大戦争』(*The Great Pacific War: A History of the American-Japanese Campaign of 1931-32*)を執筆する。この本は俗に日米未来戦記と呼ばれたフィクションであったにもかかわらず高く評価され、日米英のあらゆる層に大反響を呼んだ。日本ではただちに海賊版が何種類も出版され、国民の目の触れるところとなつた。またバイウォーターの日本敗北のシナリオに対抗して、日本勝利のシナリオを盛り込んだ日米未来戦記が続々と出版され、⁵日本人読者の愛国心を満たし、退屈な生活を紛らす精神的清涼剤となつたのであった。一方その本に描かれている太平洋を舞台とした戦略構想は、日米の海軍関係者を魅了し、両国の海軍戦略にも少なからぬ影響を与えたのであった。時を経て彼の名前は忘れ去られていったが、彼の戦略構想は多くの軍事評論家やジャーナリストにより直接的にまたは間接的に引用され、開戦まで生き長らえたのであった。しかし、バイウォーター自身はイギリスの宥和政策を非難したことにより、所属していた新聞社との関係が悪化し、1939年末解雇された。その後、バイウォー

ターの記者活動は停滞し、1940年8月に55歳でこの世を去った。

3. ホーナンが提示する仮説とその検証

本書はある一人の人物の生涯を描く単なる伝記以上の意味を持っている。なぜなら、ホーナンが取り上げたバイウォーターという人物の著書が、日米相互のイメージの形成と発展において大きな影響を及ぼしたからである。そしてそれに加えてホーナンがバイウォーターと山本との関係を綿密に調査しある仮説を提示したからである。それは、バイウォーターの著書『太平洋大戦争』を模倣して、山本は対米戦略を作成したというものである。⁶この仮説の証拠としてホーナンは4つの点を挙げている。まず第1点目として、帝国海軍は事実上イギリス人の海軍専門家を尊重しており、バイウォーターは確かにその代表だったことである。第2点目として、1926年当時、山本はワシントンに海軍武官として駐在しており、『太平洋大戦争』について詳細に何度も日本に報告し、また日本に帰国した直後の講演でもその話をしていたことである。⁷第3点目として、山本はバイウォーターと長い年月にわたり何度も会っており、このことにより山本はバイウォーターの考えに触れることが出来たことである。そして最も重要な第4点目として、山本の太平洋戦争開戦における戦略及び戦術がバイウォーターによって作成されたものと、細部においても全体においても酷似していることである。また、ホーナンは、山本がバイウォーターの『太平洋の海軍力』と『太平洋大戦争』の2冊を、海軍大学校時代に研究して^{あちだひつ}いたという証言を、真珠湾攻撃の航空攻撃部隊を指揮した淵田美津雄から得て、この仮説の信憑性を高めている。もし、この仮説が真実であるなら、真珠湾攻撃はイギリス人によって考えだされ、その構想はアメリカ人の編集者の隠れた激励の末に誕生した事になり、ホーナンが望む通り、真珠湾攻撃を「卑劣でずるい」日本人の典型的なやり口と見なす過去の流言を、少しでも消し去るのに本書が役に立つことになる。

しかしホーナンの挙げた4つの証拠からだけでは、山本がバイウォーターの戦略を模倣して対米戦略を考えたという証明は難しい。特に最も重要視する第4番目の戦略の酷似の指摘には反論の余地がある。

例えばホーナンは次のことを類似点として指摘している。「山本は日

露戦争時の旅順奇襲に批判的であった。なぜならそれは攻撃が不徹底であったからである。それゆえ山本は日米戦争においては、主力艦隊を危険にさらしてまでアメリカ艦隊を壊滅させようとしたのであった。そして、これはバイウォーターの主張していた特徴的な概念と類似している。」と。

しかし、これはバイウォーターの独創的概念とは言い難い。同じような概念はバイウォーターより以前に、水野広徳という元海軍大佐により指摘されていた。水野は日露戦争に参加した経験を持ち、それを明治、大正における代表的戦記文学として名高い『戦影』『此一戦』に書き記し、この戦争から得られた教訓を活かして日米未来戦記の『次の戦』及び『日米興亡の一戦』を執筆したのであった。山本と水野が日露戦争の開戦劈頭における日本軍の攻撃から教訓として取り上げた事柄は、山本が及川海軍大臣に送った書簡の内容と、水野の『戦影』における開戦場面の描写を比較すると、それらが大いに相重なっていることがわかる。

山本は、昭和16年1月7日付及川海軍大臣宛ての書簡の中で、日米「開戦劈頭ニ於テ採ルベキ作戦計画」を次のように述べている。

「我等ハ日露戦争ニ於テ幾多ノ教訓ヲ与ヘラレタリ 其中開戦劈頭ニ於ケル教訓左ノ如シ

- (一) 開戦劈頭敵主力艦隊急襲ノ好機ヲ得タルコト
- (二) 開戦劈頭ニ於ケル我水雷部隊ノ士氣ハ必ズシモ旺盛ナラズ
(例外ハアリタリ) 其技兩ハ不十分ナリシコト
此点遺憾ニシテ大ニ反省ヲ要ス
- (三) 閉塞作業ノ計画竝ニ実施ハ不徹底ナリシコト

吾等ハ是等成功竝ニ失敗ノ蹟ニ鑑ミ日米開戦ノ劈頭ニ於テハ極度ニ善処スルコトニ努メザル可カラズ 而シテ勝敗ヲ第一日ニ於テ決スルノ覺悟アルヲ要ス」⁸

これらの教訓は、水野が開戦直後の場面を主に描いた戦記『戦影』の中で既に述べていたことであった。まず、第一点目の開戦劈頭の急襲に関しては、「戦勝の要決は機先を制するに在りとかで、二月八日、九日、仁川、旅順に於ける我が劈頭の一撃こそ、實に日露海戦、否、日露戦争、勝敗の運命を決したものである。」と述べ、⁹それを評価して

いた。

また、第二点目の水雷部隊の士気に関しては、以下のように述べて問題点があつたことを指摘していた。

(旗艦から渡された極秘書類を)「開いて見ると、帝國は愈々露国との交渉を断つて、断然自由行動を執ることに決した、夫に就て大元帥陛下は畏くも陸海軍人に對し、優渥なる御勅諭を賜はつたと云ふ告示である。(中略)

時局解決の遷延に、稍やダレンとしたる国民の意氣と軍隊の士氣は、恰も大旱に豪雨を得たる夏草の如く、英氣發奮して勇心勃々、天を衝くの概あるに至つた。併し乍ら國際学に暗き自分等(水雷部隊を指す)は、当時、自由行動なるものが、軍事上に於て果して如何なる事を意味し、又如何なる範囲にまで及ぼされるものなるかを疑うた。実際を白状すれば、自由行動の宣言は単に宣戦布告の前提であつて、国民に対する警告に過ぎざる位に思うて居つたのである。」¹⁰

第三点目の旅順港閉塞作業失敗の点については、「風浪前を遮り、敵弾後より迫り、身は傷き、舟は壊れ、百計茲に盡きて我が閉塞隊勇士は、今や敵の躊躇殺しに遭つて居るのである」¹¹などとその作業の苛酷さを詳細に描き、「狂乱怒濤を冒して決行せられたる第三回旅順港閉塞は、その行動たるや斯くの如く壮烈に、その結果たるや、斯くの如く悲惨なものであつた」¹²と結論付けている。そしてこれらの教訓を活かして水野は、日米未来戦記『次の戦』において、日米開戦劈頭には「連合艦隊は菲律賓方面に在る敵艦隊の撃滅に力むる」作戦が採られる予想していたのであった。¹³

また、ホーナンは山本のフィリピン上陸作戦がバイウォーターと酷似していることも指摘している。「冬季の天候が悪く、またマニラに到達するには山脈や湿地帯を通らなければならぬラモン湾から、日本軍が上陸するという点において、両者のシナリオは一致している。1920年代に遡ればバイウォーターに従うかのように、ラモン湾からの上陸を考えた日本人戦略家はいた。しかし、その後ラモン湾は上陸地点には不適当だと見做されたのであった。だから、バイウォーターのシナリオに着目しなければこのような考えを山本が抱くはずはない。」と。

しかしこれもバイウォーターの独創的戦略とは言い難い。バイウォーターがラモン湾に始めて着目した以前に、例えば、日米未

来戦記作家大戸愚勝は『日米若し開戦せば』において、フィリピン上陸に関して以下のような予想を述べている。

「戦勝の餘威勃々たる帝国艦隊は愈々攻撃の幕を開演した。それと同時にラモン湾方面より上陸せる某師団の精銳は何の憂慮する處もなくドシドシ進撃を開始した。マニラやズビツク背面の防備は殆んど鎧袖一触的に破壊せられた。広漠なる叢林は片端からドシドシ焼き払はれ炎々天を焦がすが如き物凄き光景が数昼夜に亘つた。」¹⁴

このように、山本とバイウォーターとの対米戦略に酷似している点があるからといって、必ずしも山本がバイウォーターの戦略を模倣したとは言えない。別の日米未来戦記作家の影響も考慮する必要があるし、山本が独自に考案した可能性もある。山本は人一倍研究熱心であり、様々な軍事思想に触れていた。それゆえ、彼が一国の運命を決する戦略をただ一人の軍事評論家の意見を参考にして作成していったとは考えられない。また彼の日露戦争における経験、アメリカでの多年にわたる駐在経験、霞ヶ浦航空隊での教頭としての経験は、彼の思想に大きな影響を与えたことは疑いない。ただ、山本が意識してバイウォーターの戦略を真似たことはないと思われるが、無意識のうちにバイウォーターの考えに影響された可能性は否定できない。なぜなら、バイウォーターの考えは日米両国において、日米未来戦記作家、軍事評論家、海軍関係者などにより開戦に至るまで頻繁に引用され、様々な雑誌、書籍で大量に再生産され、多方面に拡散していったからである。山本を含む多くの日米両国の軍人の意識下において、また両国的一般大衆の意識下においても、知らず知らずのうちにバイウォーターのシナリオは焼き付けられたのである。そして、このことが実は山本の真珠湾攻撃を「奇襲」たらしめた一要因になったのである。以下でこのことを指摘しておきたいと思う。

4. バイウォーターが強めた真珠湾攻撃の「奇襲」性

開戦序頭における山本のシナリオとバイウォーターのシナリオとで最も著しく異なっている点は、どこを最初に日本が攻撃するかということであろう。山本はハワイを最初の攻撃地点に、バイウォーターはフィリピン、グアムを最初の攻撃地点にしていた。このことに関して

ホーナンは、山本はフィリピンやおそらくはグアムに日章旗を翻らせたかったのであり、そのためには真珠湾に集結しているアメリカ艦隊に対して、効果的な先制攻撃を仕掛ける必要があったと論じている。しかしここまで深読みをする人は当時ほとんどいなかっただろう。1920年代から1930年代の軍事的分析に優れた日米未来戦記を調べてみると、押し並べて以下のような共通点が見られる。

1. 日米戦争の原因として、排日問題と中国での利権を巡っての極東問題が挙げられ、それらのうち主因として極東問題が強調されている。(時を経るにつれて後者が重視される。)
2. 一定期間の外交交渉はあるが、最終的には決裂する。
3. 日米戦争は日本軍の開戦駆頭における「奇襲」で始まる。
4. 太平洋が戦場となり、海軍が主として活躍する。
5. 日本軍は最初にフィリピンとグアムのいずれか、あるいは両方を同時に攻撃する。(例外も若干ある。)¹⁵
6. 開戦初期においては日本軍が優勢である。
7. 日本の圧倒的勝利の可能性は低い。

これらの中で注目すべき項目は、3番目と5番目の項目である。日米両国民は現実に日米戦争が開始される前において、日本軍が奇襲攻撃により戦争を始めると認識していたのである。日本軍による奇襲は、日本人にとっては勝つためにとるべき効果的戦術であると認識され、アメリカ人にとっては卑劣な民族がとりうる卑劣な戦術だとして認識されていたのである。そして、現実にその認識通りの事が起こったのであった。日米未来戦記を読む程度に日本に関心を持っていたアメリカ国民は、おそらく日本軍の奇襲攻撃自体に対して驚きも怒りもさほど感じなかったと思われる。ただ問題であったのはどこに対してその奇襲が最初に行われるかであった。日本人もアメリカ人もフィリピンやグアム辺りにそれがなされると考えていた。その事は日本軍の真珠湾攻撃直後、ノックス(W. Frank Knox)米海軍長官が「真珠湾空襲。演習にあらず!」といった電報を受け取り、米海軍作戦部長スターク(Harold R. Stark)大将に叫んだ言葉が如実に表している。ノックスは「何だと! こんなことはあり得ない! これはフィリピンのことを言っているのにちがいない!」と叫んだのであった。¹⁶ 1941年11月24日にはすでに、キンメル(Husband E. Kimmel)米太平洋艦隊司令官、ハート(Thomas C. Hart)米海軍アジア艦隊司令官は警戒命令を受けてい

た。しかし、それは「対日交渉の好ましい結果は極めて疑わしい。われわれの意見ではフィリピンあるいはグアムをふくむいすれかの方向に奇襲侵略が行なわれる可能性がある」という内容であり、¹⁷ ハワイに対する攻撃の可能性は書かれていなかった。結局、アメリカ側は日本軍の「奇襲」がアメリカの属領になされる可能性が高いということだけ予想していたのであって、ハワイという場所を最初に攻撃してくることは予想していなかった。これはバイウォーターが強調していた見解であり、また日米未来戦記作家の多くがこの見解に同意し、彼らはそれを自分の著書に取り入れたのであった。

普通、ある一冊のストーリーを読んだ場合、途中よりも始まりと終りの部分が比較的読者の記憶に残り易い。戦争のストーリーならばなおさら、途中の複雑な経過が記憶に残るとは考えにくい。読者の関心はどうやって戦争が始まり、どのような結果でそれが終るかに集中するものである。それゆえ、アメリカ国民は¹⁸ ハワイという場所を攻撃されたことにより、予測と現実との格差が引き起こす「驚き」を感じたり、場合によれば「ショック」を感じたはずであり、またそれが「奇襲」という戦術が持つ「卑劣」というイメージと結び付き、¹⁹ 日本に対する不信と憎悪の感情を抱くに至ったのではないだろうか。そしてそれに貢献したのは、日本人でもなく、アメリカ人でもない、イギリス人のバイウォーターであった。バイウォーターは1940年夏に昇天する直前まで、母国イギリスがドイツから激しい攻撃を受けているのを憂っていた。彼のこの生前の憂慮の念は、彼がこの世に残していくた誤った予想が、アメリカの第二次世界大戦への参戦を促したことにより、晴らされたのであった。

本書においてホーナンは、山本の戦略とバイウォーターの戦略との類似点に注目して仮説を立てたのであった。しかし、それらの相違点に注目することによっても、また新たな仮説を立てることができるのである。このように日米未来戦記の著述内容は、開戦に至るまでの日米相互イメージの形成、発展の理解を深める上で、示唆に富むものである。そして本書は、それらに関する本格的な研究の嚆矢として評価できるだろう。

(Hidetou Tanaka: a Master's Program Student in International Relations, Sophia University, Tokyo)

Notes

- 1 「奇襲」の先駆的研究には、Roberta Wohlstetter, *Pearl Harbor: Warning and Decision* (Stanford, Stanford University Press, 1962) がある。ウールステッターは、アメリカ側に存在した奇襲の要因を次の八つに集約している。①「虚偽の警報」(false-alarm)に慣れっこになっていた。②ヨーロッパに気をとられ、身近に迫った「真の危機」を見逃した。③敵の情報が多過ぎ、こなしきれなかった。④情報過多の中で「ノイズ」と「シグナル」が混乱した。⑤過去の傾向に固執し、「新しい変化に」対応できなかった。⑥ワシントン-ホノルル-末端の間のコミュニケーションが、うまくいっていなかった。⑦警報メッセージがあいまいで、明確に意志を伝えることが出来なかつた。⑧官僚組織や、軍部内、三軍相互間の競争関係によって、一貫性のある意志の疎通をはかることが出来なかつた。このウールステッターの所説は「奇襲される側」の論理である。一方、「奇襲する側の論理」としては、Barton Whaley, *Stratagem: Deception and Surprise in War* (Center for International Studies, Massachusetts Institute of Technology, 1969) の研究がある。ウェイリーは外交的にも軍事的にも日本が奇襲を意図し、「時」「場所」「スピード」「集中」で相手の裏をかく、あるいは相手に誤解を与える欺瞞工作を行ったことを指摘している。詳細は、岩島久夫『奇襲の研究-情報と戦略のメカニズム』(PHP研究所, 1984年) pp 19-30 参照。「奇襲」の定義は難しいが、本稿ではそれが持つ「突発性」ではなく、「意外性」に注目し、「攻撃を受けた側の攻撃側に対する事前認識では、予測できなかつた攻撃であるがゆえに、著しい精神的動搖を攻撃を受けた側が感じる攻撃」と定義しておく。
- 2 須藤真志『日米開戦外交の研究 一日米交渉の発端からハル・ノートまで』(慶應通信, 1986年), pp 375-376。須藤氏は修正派の主張を次の四つに要約している。第一に、ルーズベルトはヨーロッパ戦争に介入したいために、日本との戦争を望み、日本に経済的圧迫を行い、日本に一発撃たせるための挑発を行つた。第二に、大統領は日米戦争の危険について多くの情報を得ており、戦争の不可避であることを自覚していた。第三に、それらの情報をハワイに送らなかつたばかりか、故意に差し止めた。第四に、ハワイの太平洋艦隊を日本の奇襲攻撃のオトリにした。須藤真志『日米戦争の原因と歴史的評価』現代アジア研究会編『世纪末から見た大東亜戦争—戦争はなぜ起つたのか』(プレジデント社, 1991年) pp323-324。
- 3 入江昭『日米敵対意識の源泉』、日本国際政治学会編『日米関係のイメージ』季刊国際政治(有斐閣, 1966年)所収, pp1-18。
- 4 日本の外務省もバイウォーターの活躍に関心を寄せていた。外務省情報部発行『世界新聞要覧上巻(満・支以外の各国)昭和十四年版(外務省情報部, 1939年)pp275-276 のボルチモア・サンに関する記述には、「華府会議(一九二一~二年)開催前サンは其の重大性を認め、其の成功に貢献し又此の機会に米国人の国際問題に関する知識を博めんとの考より、会議前人を欧洲に派し、会議中右に関する各国の権威ある記者の寄稿を得る様手配した由である。当時英國のバイウォーター、エッチ・ジー・ウエルス、仏の Pertinax 其の他の労作がサンに連載されたことは著名な事実である。(以下略)』という箇所があ

る。

- 5 本稿において、日米未来戦記は、現実の日米戦争であった太平洋戦争が勃発する以前から、日米戦争の発生、経過、結果に関し、想定的に叙述された軍事小説や軍事評論と定義する。具体的な例は、稻生典太郎「明治以降における「戦争未来記」の流行とその消長—常に外圧危機感を増幅しつづける文献の小書誌」『国学院大学紀要』第七巻(国学院大学、1969年)に多数挙げられている。
- 6 このことを指摘しているのはホーナンだけではない。*INFAMY: Pearl Harbor and Its Aftermath* (New York : Doubleday & Company, 1982)の著者ジョン・トーランド(John Toland)もその書の中で、簡潔ではあるがホーナンと同様の主張を展開している。Toland, *op. cit.*, pp249-252.
- 7 山本が直接バイウォーターの著書に言及したかどうかは不明である。山本は1928年の水雷学校での講演において、「将来航空機が主力艦にとって代わるであろうこと、また万一日米戦争が起こった場合は、守勢作戦はとらずハワイに進攻せねば勝ち目はない」という趣旨の発言をしたという事が明らかなのである。日本海軍航空史編纂委員会編『日本海軍航空史(1)用兵編』(時事通信社、1969年), p278。
- 8 防衛庁防衛研修所『戦史叢書ハワイ作戦』(朝雲新聞社、1967年), p84。
- 9 水野広徳『戦影』『戦影、此一戦、空爆下の帝都』戦争文学全集9(潮文閣、1939年)所収, p52。『戦影』は1914年に出版された。
- 10 水野(1939年)同掲書, p49。
- 11 水野(1939年)同掲書, p97。
- 12 水野(1939年)同掲書, p101。
- 13 水野広徳『次の一戦』(金尾文淵堂, 1914年), p174。
- 14 大戸愿勝『日米若し開戦せば』(松成堂須原屋本店, 1914年), p36。
- 15 例外には水野広徳『日米興亡の一戦』(東海書院, 1932年), エリオット, 広瀬彦太訳『米国武官の見たる日米未来戦』(有終会, 1930年)などがある。特に、前者の水野の著書には、ハワイの重要性の認識、アメリカ国民に精神的打撃を与えるための飛行機による奇襲攻撃、および短期決戦の重要性の強調など、山本の戦略と似通った箇所が多数見られる。
- 16 ゴードン・プラング、千早正隆訳『トラ トラ トラー太平洋戦争はこうして始まった』(並木書房、1991年), p314。この書自体に英語版ではなく、これにアメリカ側の資料を加筆したものが、Gordon Prange, *At Dawn We Slept : The Untold Story of Pearl Harbor* (New York : McGraw-Hill, 1981) (土門周平・高橋久志訳『真珠湾は眠っていたか』全三巻, 講談社, 1986年)として出版されている。
- 17 日本国際政治学会太平洋戦争原因研究部編著『太平洋戦争への道—開戦外交史』新装版7日米開戦(朝日新聞社, 1987年), p452。
- 18 実際にどれほど多くのアメリカ国民がバイウォーターの著書に目を通したかはわからない。当時の一般的なアメリカ国民が国際情勢に、いわんや日米関係に興味を持っていたとは言い難い。しかし、それはさほど重要性を持たない。バイウォーターの著書がアメリカの軍人、ジャーナリスト、政治家などに広く読まれたことが重要な意味を持つのである。なぜならば、当時において彼らこそがアメリカでの世論を形成するのに大きな影響する。

BOOK REVIEWS

響力を持ったからである。そして、彼らの真珠湾攻撃による心理的動搖とその価値判断が、マスメディアを通してアメリカ全体に流布することにより、アメリカ国民全体の戦争開始後の日本に対する見方は決定づけられたのである。

- 19 この場合の「奇襲」は、宣戦布告なしで戦闘行為を開始するという、国際法の違反行為としての意味合いが強い。日本海軍は当時、開戦ニ関スル条約(1907年ハーグ第3条約)を尊重して、武力行使30分前に通告を行う予定であった。しかしワシントンの日本大使館の怠慢で、通告は武力行使後になってしまった。